

特集 街角の交流文化

ロンドン、ウィーン、クアラルンプール、東京



特集・街角の交流文化

立教大学観光学部

特集

街角の交流文化

ロンドン、ウィーン、クアラルンプール、東京

04 *London - Banglatown*
イギリス最大のベンガル人コミュニティ
大橋健一

14 ウィーン点描
斎藤松三郎

18 Kopitiam
マレーシアの交流文化スポット
舛谷 鋭

22 「すれちがい」から
ほんとうの「出会い」へ
田中 望

32 「交流文化」フィールドワーク②
秋田の農村観光調査
村上研究室

36 読書案内
『カンボンのガキ大将』

38 最近の講演会から
旅の出版社をいかに立ち上げたか
蔵前仁一

44 在外研究通信 02
観光資源としての
common pool resource とは何か
小沢健市



2006年4月、 立教大学観光学部に 新学科 「交流文化学科」誕生。

国や地域間を問わず、観光による移動は人々の意識を変え、文化を変容させていきます。

2006年4月に開設される「交流文化学科」は、近年観光の役割として注目されている「交流」に焦点を合わせ、地域研究とともに、多文化共生への視点を養い、グローバル化する世界で交流の実をあげうる国際公務員、ジャーナリストなど国際的人材の育成を目指します。



立教大学観光学部
〒352-8558 埼玉県新座市北野1-2-26
TEL 048-471-7375
<http://www.rikkyo.ne.jp/grp/tourism/>

立教大学観光研究所 公開講座

立教大学観光研究所では、以下の公開講座を実施しています。

●ホスピタリティ・マネジメント講座

(2005年9月末開講 12月修了)

ホテル・旅館業・外食産業を中心とするサービス産業は、今日「ホスピタリティ産業」と呼ばれています。その基本理念から、人事、経営、マーケティング、法律などの実践的な理論まで、業界の著名な方々が講義します。

●旅行業講座

(2006年5月開講 7月修了)

旅行業に必要な専門的、かつ実際の知識を一流の講師陣が、実務経験のない人にもわかりやすく講義します。毎年秋に行われる総合旅行業務取扱管理者試験(国家試験)に向けて、法律から海外・国内観光資源、旅行実務など幅広い内容を扱います。

詳しくは、立教大学観光研究所事務局(池袋キャンパスミッチェル館)へ。
TEL 03-3985-2577 FAX 03-3985-0279
Email: kanken@tr.rikkyo.ac.jp <http://www.rikkyo.ne.jp/grp/kanken/>

創刊号では、中国の辺境地域である

雲南省西双版纳を特集したが、

二号では、グローバル化が進み、

さまざまな背景を持つ人々が暮らし、往来する

都市を拠点とした「交流文化」を考える。

ロンドンでは、都市再開発と集客化の動きの中で

変化する移民街の状況について。

ウィーンでは、都市のさまざまな横顔から

「交流文化」のありようを点描する。

クアラルンプールでは、多民族国家マレーシアの

日常生活文化の中から民族間交流の変遷について。

そして東京では、都市が背負う歴史を通して

私たちの足もとから哲学としての「交流文化」を語る。

交流拠点としての都市の魅力は、

こうした交流をめぐる歴史的地層と文化的多様性にある。

特集

街角の交流文化

ロンドン、ウィーン、クアラルンプール、東京

01.

London

London - Banglatown

イギリス最大のベンガル人コミュニティ 大橋健一（観光学部）

世界金融の中心地シティの東側に隣接する
タワーハムレット区の人口の約3分の1はベンガル人。
古くから移民を受け入れてきたロンドンのイーストエンドで起きている
まちづくりと観光をめぐる新しい動きとは。

写真/大橋健一、結城良彦、松岡宏大



都市構造再編のはやまい

オリンピックや博覧会などのメガ・イベントの誘致、開催、大規模な都市再開発プロジェクトなど、現代の世界の大都市は、大がかりな仕掛けを通して都市の構造を再編集し、集客、観光を軸とした都市間競争にしのぎを削っている。しかしながら、このようにして再編成される都市が、そこに暮らす者、そしてそこを訪れる者双方にとって、はたして本当に魅力的で、交流に満ちた場となりうるかという点に関してはよく考えてみる必要がある。



ブリック・レーン一帯には、約60軒のカレー・レストランが軒を列ねている。

ある。
たとえば、イギリスのロンドンには、パリやニューヨークなどの世界の大都市との競争の末、二〇一二年のオリンピック開催地に決定した。オリンピック開催予定地を含むロンドン東部一帯は、ドックランドなどを中心に近年大規模な都市再開発が行なわれてきた場所であるが、オリンピックの誘致、開催は、いわばこの再開発のひとつの重要な画期をなす一大イベントということになるのだろう。しかしながら、たとえば、このドックランド再開発地区を実際に訪れても感じるのだが、ここで展開している動きは、「交流」という語感もたらす生身の人間の存在を感じさせない、どこか抽象的で、空虚な感覚をわれわれに抱かせる。

同じロンドン東部をめぐって交流の場としての都市という問題をより身近なものとして考える際、これとは対照的に興味深いことは、この地区の中心であるタワー・ハムレット区にバン格拉デイシユ出身者をはじめとする大きな移民コミュニティが存在することであり、彼らが都市の構造再編と再開発の展開の中で見せている、まちづくりと観光をめぐる新たな動きである。

「バングラタウン」の創造

世界金融の中心といわれるロンドンのシティ、その東側に隣接する地区がタワー・ハムレット区である。現在、この区の人口の約三分の一はベンガル人であり、ここはイギリス最大のベンガル人コミュニティとなっている。彼らの多くは、現在のバン格拉デイシユからの移民であり、イギリスによる植民地化、第二次大戦中の船員としての雇用、第二次大戦後のイギリスにおける労働力不足、南アジア地域の脱植民地化過程での政治的混乱などさまざまな理由からこの地にコミュニティを作り上げてきた。しかしながら、ロンドンのイーストエンドとして知られるこの地区は、古く一七世紀末にはフランスからユグノーと呼ばれるプロテスタント系難民を受け入れ、さらに一九世紀にはユダヤ系移民を数多く受け入れてきた歴史を持つ場所である。このような地域の歴史は、ブリック・レーンという通りにあるモスクの建物が、二五〇年という時間の流れの中でプロテスタント教会、メソジスト教会、ユダヤ教シナゴグ、そしてイスラム教モスクへと移り変わってきたことにきわめて象徴的に表れている。

「バングラタウン」をめぐる動き

1947	インド独立 インド、パキスタン分離
1951	Pakistan Welfare Association 設立 71年のバン格拉デイシユ独立に伴い、 後に Bangladesh Welfare Association に改称
1971	バン格拉デイシユ独立
1976	ブリック・レーンのモスク Jamme Masjid 開設
1995	この頃よりカレー・レストランの集積始まる
1996	Banglatown Consultative Forum を組織 「バングラタウン」コンセプトを具体化 ブリック・レーン・フェスティバル開始
1997	ブリック・レーン・アーチ完成
1998	バイシャキ・メーラ開始



「バングラタウン」のメインストリート、ブリック・レーン。通りの名を示す標識にはベンガル語も。



ロンドンのイーストエンド一帯は多くのカレー・レストランが集まる「バングラタウン」として知られる一方、バングラディッシュ移民にとっての重要な生活の場である。

そして現在、さまざまな都市再生プロジェクトの展開の中でこのブリック・レーン一帯は、「バングラタウン」の名のもと、多くのカレー・レストランの集まる場所としてロンドンの名所の一つとなっている。実は、一説にイギリスにおけるカレー・レストランの八割以上は、南アジア系移民の中でも特にバングラディッシュ系移民によって所有、経営されているといわれ、カレー・レストランの経営とバングラディッシュ系移民とは密接な関係を持っている。一九九〇年代半ばごろからブリック・レーンにはカレー・レストランの集積が見られるようになったというが、これらのレストランは、主として地域に隣接するシテイのオフィス街で働く人々をターゲットに本場のカレーを味わえる場所としてアピールした結果、多くの客を引きつけ、それがさらにレストランの増加を促した結果であるという。

現在、ブリック・レーン一帯には約六〇軒のカレー・レストランが軒を列ねている。これらのレストランに特徴的なのは、客層やトレンドを意識した「コンテンポラリー」「モダン」をキーワードとした新しいカレー・レストランの形が模索されていることである。店舗の外観やインテリアも単に顧客のエキゾ

テイシズムに訴えかけるような表現ではなく、ある種の洗練が追求されている。いっぽうで、この地域は依然としてバングラディッシュ系移民にとって重要な生活の場でもある。地域の雑貨店の店先には、ベンガル語の新聞や雑誌が並び、CDショップからはバングラポップが流れる。イスラム教の宗教用品を扱う店、ハラールをうたうハンバーガーショップもある。礼拝の時間ともなるとブリック・レーンのモスクには、多くのムスリムが三々五々集まってくる。

「ブリック・レーン・フェスティバル」

九〇年代半ばにレストランの集積が顕著になると、地域では「ブリック・レーン・フェスティバル」というイベントを開始し、通りの入口にはアーチも設置された。地元の話では、これらのアイデアは、ロンドンのソーホー地区の



あるレストランのウィンドーには、ロンドン市長が「バングラタウン」を訪問し、カレー料理を楽しんでいる写真が掲げられている。今や行政の側もこの地区に大いに注目している。

「チャイナタウン」が参照されたとのことだ。しかし、九八年からは、ベンガルの新年を祝う「バイシャキ・メーラ」というイベントも開始された。単なる集客、地域プロモーションのイベントを超えて、バングラディッシュ系移民の文化的背景に訴えかけたこのイベントは、広くバングラディッシュ系コミュニティからも支持を得、大きな盛り上がりを見せる地域のイベントとなっている。

ブリック・レーンを北上し、ハンブリー・ストリートを超えた辺りから、街の雰囲気は少し変化し始める。この地域に流入した移民が歴史的にも多く繊維、縫製、アパレル産業に関わってきたこともあって、また、さまざまな地域再生事業が行なわれたことも手伝って、最近この辺りには、ロンドンでも最先端をゆく若手のクリエイターやデザイナーが店やスタジオを構えるようになっており、この地域はバングラ



1・2 ベンガルの新年を祝う「バイシャキ・メーラ」。毎年大きな盛り上がりを見せる地域の一大イベントとなっている。3 食品店の看板にも「バングラタウン」がうたわれている。4 この建物は地域が受け入れてきた移民の変遷に伴い、キリスト教会からユダヤ教シナゴグ、そしてイスラム教モスクへと変化した。5・6 「コンテンポラリー・バングラデッシュ料理」を売り物にする「バングラタウン」のレストラン。

交流文化と都市の魅力

われわれの多くが普段何気なく暮らし、行き来している都市。そこはさまざまな形の交流に満ちている。古来より都市は、人や情報、モノの流れの結び目となってきた。であるがゆえに、都市にはさまざまな人、情報、モノが集まり、都市の魅力を醸し出し、そのこと

二〇〇四年、タワー・ハムレット区役所は、「バングラタウン」としての歴史をテーマとしたこの地域のウォーキングツアー・マップを作成した。複合的な魅力をもったロンドンの新たな観光スポットとして今や行政の側もさかんにこの地域に注目している。とはいえ、ここへと至る道程は、決して平坦なものではなかった。地域では九〇年代に至るまで貧困と犯罪、移民に対する差別や排斥、都市の疲弊と地域の衰退は深刻な問題であった。これらを乗り越え、地域を再生させる方法のひとつが「バングラタウン」の創造であった。人々の努力が実り、現在「バングラタウン」は、地域の正式な地名としても使われている。

ここに紹介した「バングラタウン」は、ロンドンという都市が広い意味での人間の交流の結び目であることよって生まれたひとつの交流文化の形といえるが、いまだに解決されるべき多くの問題を抱えていることも事実である。それは必ずしも予定調和的に辿り着いた理想形でも完成形でもなく、常にさまざまな問題を孕みつつ、それらをひとつひとつ乗り越える過程でさらに変化、成熟してゆくものだと考えられる。地域に「バングラタウン」という名前がつけられることをめぐっては、長年にわたって行政の内部でも、またバングラデッシュ系以外の地元住民からも反

がさらにそれらを引き寄せ、媒介することになった。今日、多様な観光のスタイルがある中で、依然として世界各地の大都市に多くの人々が訪れるというのも、ただ単にそこが訪ねようとする地域の人口や通り道であるという理由以上に、多様な交流に裏打ちされた都市そのものが持つ魅力に引き寄せられた結果であるといえるだろう。

二一世紀における都市の可能性が、観光や集客をも含んだ広い意味での交流というテーマにあるのだとするならば、われわれは、改めて都市が持つ媒介、交流の働きとはいったいどのようなものであるのかを探る必要があるだろう。都市をめぐる背景の異なる人々の衝突や葛藤をも含んだ交流が創り出す多様な文化の理解と都市が蓄積してきたそのような交流をめぐる歴史的掘り起しは、都市の魅力の再発見、再定義となるだろう。そして、それは現代の観光において重要性を高めている都市観光の未来を考える作業ともなるに違いない。

対意見が出され、多くの議論がなされたという。現在見られる地域の姿は、都市を構成する多様なアクターの間の一連の交渉、折り合いの結果である。



2004年タワー・ハムレット区役所が作成した「バングラタウン」のウォーキングツアー・マップ



9



8



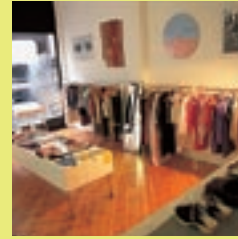
6



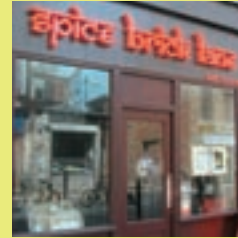
7



11



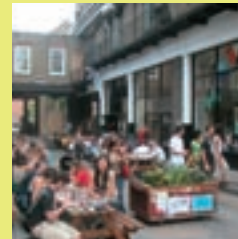
1



2



3



4



5

「バングラタウン」を歩く

「バングラタウン」一帯は90年代のさまざまな都市再生事業を経るなかで、バングラディッシュ系移民の生活の場であることはもちろん、さらに多くの来訪者を引きつけるさまざまな顔をもつ地域へと大きく変貌している。



10



12

1 バングラタウンの周辺には、近年ロンドンの若いクリエイターのスタジオやギャラリー、雑貨店、カフェなどのカルチャースポットが急増している。
2・3 ブリック・レーンのカレー・レストラン 4・5 1988年に閉鎖されたビール工場を改装し、ブティックやカフェ、クラブ、バーなどが出現。流行の発信地となっている。クラブはロンドン生まれのベンガル系ミュージシャンの活動拠点にもなっている。
6 Jamme Masjid 7 Kobi Nazrul Centre バングラディッシュの国民的詩人Kazi Nazrul Islamの名にちなんだアートセンター
8 イギリス最大のベンガル人コミュニティ組織 Bangladesh Welfare Association 9 Cafe Naz「コンテンツラリー」をうたうバングラディッシュ・レストラン。80年代初めビデオが普及する以前は南アジア映画を上映する映画館だった。
10 Sonali Bank バングラディッシュの家族親類への送金などによく使われるバングラディッシュ系銀行。
11 Altab Ali Park 1978年に人種差別主義者による殺人の犠牲になったベンガル人の若者の死をいたんで名づけられた公園 12 Brick Lane Arch

ウィーンは「観光都市」か？

二〇〇一年アメリカでテロ事件（九一一）が発生した後、ウィーン観光局は九月の旅行者の宿泊数を速やかに調べている。前年同月比で六％近く落ち込み、米国からの旅行者は激減して三％のマイナス、日本人客も八％減少。観光局は、大勢の旅行者が航空機を利用してオーストリアの首都を訪れることはしばらく見込めないと判断して、五〇万ユーロ（ユーロ＝約三五百円）の特別会計を組み、自動車で移動可能なドイツ・イタリア・スイス等の周辺国と国内諸州で一〇月半ばから宣伝活動をくり広げる。

こうした迅速な対処に限らず、ほぼ二〇〇の名所記念館に観光局がとり付けた銘板と国旗を象徴する紅白の旗、博物館・劇場等の文化施設の整備や観光客を対象にした催し物の企画を眺めると、ウィーン市がいかに観光産業に力を注いでいるか一目瞭然である。そのうえ主な見所は、四キロの環状道路（リングシュトラッセ）および一キロ強のドーナウ運河岸壁道路（F.ヨーゼフ・カイの一部）を円状に走る路面電車によってとり囲まれた旧市街とその周辺に集中している。その他の観光

名所にも、旧市街から放射状に延びた路面電車・地下鉄・バスを利用すれば、容易に辿りつける。観光客にとってなんと便利な市営交通網だろう。

しかし独立した連邦州でもあるウィーンは、単なる観光都市なのだろうか？ 観光局はさまざまな工夫を重ねているものの、州の産業はその一点に集約されるものではない。外来者が目を見はる宮殿や教会等のさまざまな建物や芸術文化、便利な交通機関は観光目的に作られたものではなく、かつてこの

地に住んだ「ウィーン人」、つまり皇帝や貴族、多数の市民や労働者のために造営された社会・文化施設に他ならない。地方から流入する人口の増大に抗しきれず、一九世紀中葉から始まる都市改造は、過去の円形城塞都市の構造を生かし、城壁や幅広い斜堤（無人地帯）をとり崩したうえで、当時の天才的建築家・芸術家たちが人工的な意匠を凝らしながらウィーン人の生活のために推進したものである。ヨーロッパのさまざまな歴史様式、さらには合理的機能美を生かした都市計画のおかげでウィーンは華麗な近代のメトロポリスへと変身し、観光客は名所旧跡見学の好奇心

ウィーン点描

齋藤松三郎（観光学部）

交流をめぐるこの都市の持つさまざまな横顔を
体験と思索から緩やかに描き出す。

写真／オーストリア政府観光局



02. Wien

を充たすとともに、芸術鑑賞やショッピングの楽しみも満喫できるのである。手入れの行き届いたウィーンの森では今年仕込みのワイン「ホイリゲ」を傾けるとともに、自然との触れ合いも楽しめる。必要に迫られた都市改革、つまり現地人のための生活空間の改造が観光の魅力と利便性を潜在させていたのである。もちろんウィーンは単なる歴史的遺物ではなく、国連シティーを構築したり、見本市都市機能をととり込んだりして新たな発展を目指している。

「ウィーン人」とは誰か？

ウィーン市（州）は二三区から成り、広さ

は四〇〇平方キロ強で、東京二三区を合わせた面積のほぼ三分の二に相当し、最新の統計によると二〇七万人の人々が生活している。

カフェはウィーン人の生活に密着した文化施設である。ある時、常連でにぎわうカフェに赴いたところ、「日本人の祖先は誰か」という話題になった。奇妙なことに、ドイツ語圏のクロスワード・パズルの正解はいつもアイヌである。北方ルート説に並行して、南のパプアから舟に乗ってやって来たという説も、モンゴル系の民族が中国や朝鮮半島を経て渡来したという説もあると説明したところ、「生粋のウィーン人」と称する婦人が「私の娘が



ウィーンのカフェ（カフェ・ティローラーホーフ）

誕生した時、医者から蒙古斑があると云われた。どういふこと？」と質問してきた。私は「ご主人かあなたの家系にアジア系の血が混じっているのでは？」と答えておいたが、それはウィーンの歴史を紐解き、地理的条件を眺めてみるとあり得ないことではない。

ウィーンは中欧のほぼ中心に位置し、昔から何本もの交通路の交差点にあたり、ハプスブルク帝国の首都だったため、経済・政治・文化・宗教等の諸力が交錯し、交流文化が生まれざるを得なかった。帝国内や国境周辺のさまざまな民族が大挙してウィーンに流入し、大都市の成立を促したのである。ウィーン人のコスモポリタンの精神は交錯した文化の結果であって、最初から存在していたわけではない。四世紀以降の遊牧民フン族の侵攻は度外視するにしても、ウィーンへ流入した民族はゲルマン系のドイツ人、蒙古・トルコ系のハンガリー（マジャール）人、スラブ系のチェコ・スロヴァキア・ポーランド・ルーマニア・スロヴェニア・クロアチア・セルビア人、ラテン系のイタリヤ人、さらにはユダヤ人やロマ（ジプシー）と多岐にわたる。一五世紀末「戦

せいぜい三人がドイツ系だが、しかし二人に一人はスラブ系の父か母、あるいは少なくともスラブ系ないしハンガリー人の祖父か祖母がいた。長く定住している家庭ではイタリヤ人やフランス人の血が一滴は混じっていた」と述べている。

ウィーンは多民族を混和している都会である。そして第二次大戦後の冷戦のさなかや旧ユーゴスラヴィア解体の際には東欧の難民を積極的に受け入れるとともに、アラブ系・アジア系の外国人労働者も迎え入れている。ウィーン人はコスモポリタンの精神にあふれているとはいえず、同時に新規な移住者たちが自分の生活を脅かすのではないかとという不安も抱いていて、ともすれば政治的に挑発された外国人排斥思想の影が見え隠れする。

街角の「多文化」と「交流文化」

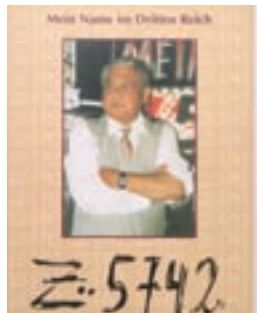
私のウィーンでの研究生活はドイツ滞在と比べると、食事の点で苦勞が少なく快適だった。多くの民族の厨房が揃っているため、料理は自在に選択できるし、自分の味覚の好みを言えば、高級レストランでもそれに応じて調理してくれる。ウィーンは多くの民族を呑みこんで多文化を混在させながら呼吸してい

る街である。観光名所のナツシユマルクト（旨いもの市場の意）やその他の大きな市場を訪れると、南はトルコ・バルカン諸国・イタリヤ、東はハンガリー、北はチェコ、そして遙か遠方のアジアから流入した多様な食品が並んでいる。また、それを売買している人々も多様な顔立ちをしている。

観光という視点から少し逸脱するかも知れないが、異国の色々々な体験と遭遇することも旅の醍醐味ではないだろうか。旧市街のカフェではユダヤ人（母はフランス系？）とも面識になった。父親はナチによってアウシュヴィッツ強制収容所に送り込まれるものの、戦後帰還して、恐怖に満ちた体験の数々を表現主義的タッチで赤裸々に絵画表現している。亡父の絵の印象とは全く逆にお坊ちゃん風に洗練されたウィーン人の息子は父の絵



ユダヤ人Adolf Frankl (1903-1983)の絵画写真集の表紙。画題は「最後の叫び」。フランクはプレスブルク（現在スロヴァキアの首都ブラチスラヴァ、ウィーンの東方ほぼ55km）生まれ。強制収容所から帰還した後は、ウィーンの有名なカフェ「ハヴェルカ」の階上にアトリエを構えた。この絵画集は「紀元2000年記念祭」の折に、息子トーマスがローマで企画した美術展「地獄のヴィジョン - 忘却に逆らう芸術」のカタログである。画集のなかに収録されたアドルフの言葉を拾ってみよう。「私は自分の作品で世界のすべての民族に警告の記念碑をうち建てた。宗教や人種や政治見解がどうであろうと、誰もこうした体験やこれと似た境遇に遭ってはならないのだ」。



ロマの画家Karl Stojka (1931-2003)。「ホロコースト展」のために作成されたカタログの表紙。ストイカはオーストリアの小村生まれ。若くしてアウシュヴィッツおよびドイツのブーヘンヴァルトとプロッセンビュルクの強制収容所へ送り込まれた。この本には、ゲシュタポ（ナチの秘密国家警察）が逮捕したロマとシンティ（系統は違うものの、双方ともジプシー）の生活や彼らの顔および個人情報写真が掲載されている。ストイカは50年かけてそれらの資料を探しまわり、ベルリンの連邦公文書館で発見。人類史の残酷さ・悲惨さの記念碑のひとつとして後世に伝えることを企画。彼の描いた絵もその一部である。1999年、「プロフェッサー」となる。

を管理しながら、オーストリア・ドイツ・アメリカ等の各地で美術展を開いている。他のカフェで知り合ったウィーン人が「プロフェッサー」を紹介するというので、同行したことがある。その称号が大学教授を意味するのではなく、オーストリア連邦首相が職業上すぐれた業績をあげた人に与える肩書だと分かったのは、相手に面会した時だった。彼は肌が浅黒く、がっしりとした体格のロマ系の画家だった。アトリエに導かれたため、彼の絵を拜見できるものと期待したが、しかし彼が見せてくれたのは、ナチが彼の左腕に刺青した識別番号だった。アウシュヴィッツをはじめ各地の収容所をたらい回しにされて強制労働に服した彼は、大阪で「ホロコースト展」を開催した時のことを懐かしそうに物語った。彼が収集したホロコーストに関する

資料および自作の絵はこれまでヨーロッパ各地で展示されている。彼がアピールしようとしたのは「止めてくれ、もう二度と！」「目覚めよ！」という絶叫にも似た声が訴えるように、地球上の絶対的・無条件の平和だった。また、あるカフェの経営者はパレスチナ系のウィーン人で、イスラエルに対する抗議運動に係わっているため、店にいないことが多かった。ある時、彼が大量のパンフレットを店内に持ち込んだので、「こんな質問をすることからといって、怒らないで下さい」という条件のもとに、政治問題についてあからさまな質問をしたことがある。すると彼は笑みを浮かべながらこう切り出した。「いや、心配ご無用。ウィーンのカフェでは、人間が感じ考えたことは何であろうと喋っていいんです。ウィーンとはそういう街なんですよ」。



Kopitiam

マレーシアの交流文化スポット

舛谷 鋭 (社会学部)

マレーシアの「Kopitiam」と呼ばれるコーヒー店。そこではどんな民族間交流が行われているのだろうか。

写真/舛谷 鋭、松岡宏大



マレーシアは、タイから連なりシンガポールまで延びるマレー半島と、ボルネオ島の北部とに国土を二分する国である。日本から一番近いのはボルネオ島、サバ州のサンダカンで、マレーシア往復の国際線では、それと知らず経由していることもある。しかし、旅行者の多くが目的地とするのは首都クアラルンプール近郊のKLIA (クアラルンプール国際空港) を玄関口とするマレー半島だろう。

マレーシア旅行の訪問地としてベナン、クアラルンプール、マラッカ、そして隣国シンガポールが組み合わされることも多い。地図上でこれらの都市を探してみると、いずれもマレー半島の西海岸に位置していることがわかる。歴史的には十九世紀以来、イギリスの植民地だった「マラヤ」の中でも、ベナン、マラッカ、シンガポールの三都市は海峡植民地と呼ばれ、錫(ピュター)等の集積地として宗主国イギリスに多大な利益をもたらした。

華人男性とマレー人女性のラブストーリー

マレーシア旅行に来たものの、トドン(スカーフ)を冠ったマレー人女性や、ターバンを巻いたインド系の人たちもいることはいるが、漢字の看板も多いし、中国語も聞こえて来る。何だか町中チャイナタウンみたい、とはよく聞かれる感想だ。旅行者が接するのが主にサービス業の人々のせいもあるが、前述のような歴史的経緯から、西海岸の諸都市には鉱山労働者として中国系(華人)住民が多く集住していた経緯がある。かつてはイギリス人植民者との仲介役として、華人集団の元締めである「Kapitan」が置かれていたこともあるほどだ。

特に華人の比率が高く、州知事など行政面でも華人がイニシアティブを執るベナンは、世界的に見ても代表的なチャイナタウンの景観と言える。

しかし、マレーシアは中国の華南や台湾、また香港やマカオなどと決定的に違う点がある。イスラム教徒であるマレー系住民が人口の六割を占め、政治的な主導権をも握っているという点である。我々がしばしば訪れる西海岸の諸都市で華人が少数民族に見えないのは、その分東海岸のカンポン(村落)にマレー人が集中している裏返しでもある。宗教が異なり、小学校から政党、墓場まで民族別に住み分けるマレーシアに、民族間の接触の場は多くない。国際的にも評価されたマレー人女性監督ヤスミン・アーマツドの映画『SEPI』は、華人男性とマレー人女性のラブストーリーという「禁忌」を描いて話題になった。

マレー人女子高生のオーキッドは、母の影響で香港映画がお気に入り。特に中国人男優の細目の一重瞼が好み。ある日インド系の親友リンと市場をひやかしている、海賊版VCD売りの華人青年ジェイソンに出会い、二人は引かれ合う。ジェイソンの友達の華人は言う。「マレー人の彼女なんて面倒の種なだけさ。イスラム教に改宗しなきゃならない」。広東語を操るヤスミン・アーマッド監督の夫も華人で、この映画は体験に根ざしたストーリーでもある。

それでは、西海岸の諸都市には交流文化の場はないのか? イポーを舞台にした『SEPI』で二人がデートしていた交流文化のホットスポットは、都市ならではの「Kopitiam」だった。

03
Kopitiam
Lumpur

五三事件以後の世代と「Kopitiam」

「Kopitiam」とは中国語福建方言で「コーヒー店」のことである。華人の五大幫（グループ）の中でも、福州人、海南人が経営していることが多い。インド系のイスラム教徒が経営している店は Mamak ストール（屋台）と呼ばれる。中国華南沿海部から東南アジアの都市にかけて特徴的な、ショップハウスと呼ばれる回廊で連なる二〜三階建ての長屋の一階に、オープンカフェとして朝



1 イボアのKopitiamでは白コーヒーが定番
2 マラッカのショップハウス通り 3 クアラルンプールのチャイナタウンはアーケード完備
4 ミルク、砂糖たっぷりのペナンコーヒーとトースト、卵のセットはKopitiamの典型メニュー

Kopitiamで過ごした時間をなつかしく思うこととも関係するのだろう。ここでならマレー人の友達とも、インド系でヒンズー教徒の知人とも安心して語り合い、時を過ごせる。

様変わりしつつある交流の場

クアラルンプールの旧市街の中心にあるベタリン通りは「茨廠街」という中国語名でも知られるが、近年は通り全体に屋根が掛かり、多くの屋台が出る観光スポットとしてにぎわっている。周

から晩まで営業している店が多い。天井には直付けの大きな扇風機がぐるぐる回っており、虫除けの役目も果たしている。奥のスペースは冷房が効いていることもある。

テーブルクロスのない丸卓と、背もたれのないイスに好みの場所を決めると、それぞれ店によって特別の入れ方をしたコーヒーを、Kopi O（ブラック／福建南部方言）、Kopi C（砂糖／海南方言）などと頼む。イボアには白コーヒーというのもある。Nanyang（ココナッツ）ジャムトーストとゆで卵も欠かせない。なぜか水槽が置いてあって、よくわからない大きな川魚がじつとしてる。

マレーシア華人にとって、こうしたKopitiamは、今や文化的な存在であるらしい。一九五七年、イギリスから独立後、一九六九年は最大の民族間摩擦の年として記憶される。同年五月の選挙で躍進した野党支持者（華人）と与党支持者（マレー人）の人種暴動は、五月二三日に流血の惨事となり、二百名近い死者を出した。翌年、独立の父、初代首相ラーマンは引退し、マレー人優先の新経済政策の時代へと進み行く。特にこの五三事件以後の世代にとって、Kopitiamは典型的な民族間交流の場として映るようだ。

たとえば、ピンホ制作の『Kopitiam』は一九九七年のテレビドラマだ。亡き父のコーヒーショップを継いだマリーは、店を改装し「Kopitiam」と呼ぶことにした。友達のスティーブや俳優修行中のジョー、シンガポリアンで法律家のスーズンも加わって、彼女のKopitiamは大にぎわい……。

他にも短編映画や小説など、Kopitiamを舞台とした作品は少なくない。それは彼らが子供のとき、親に連れられて古き良き辺のスルタン通りなどには百年以上経ったショップハウスが多いが、保存修復の進んでいるシンガポールに比べ、生活空間そのまま、細い路地奥の市場は香港映画『重慶森林』（邦題・恋する惑星）に描かれた近い昔の香港を彷彿とさせる。

Kopitiamは、こうした「オールドショップハウス（老店屋）」のあちこちに見られるが、ある日突然崩れ落ちることがある。二〇〇五年四月十三日、その日はやってきた。熱帯につきもの夕方から夜にかけての雷雨、スコールが激しさを増したとき、スルタン通りの戦前からのショップハウスのうち、二棟の二階部分が滑り落ちた。幸い怪我人が二人出ただけだったが、続きの七棟に崩壊の危険があり、二人が政府の施設に収容された。周りの喧嘩と関わりなく、住民のほとんどは老人だった。

今や街角の交流の場は、グローバル化の象徴である「マクドナルド」や、華人ばかりでなくマレー系でもインド系でも安心して食べられる「ケンタッキーフライドチキン」に様変わりしつつある。クアラルンプールの無線LAN「ホットスポット」第一号は、モントキアラの「スターバックス」と言われるが、他にも「コーヒービーン」など、外資系のチェーン店では民族を問わず、パソコン片手に商談している人たちが多く見受けられる。甘くないコーヒーを根付かせた功績はあるものの、これらのチェーン店がなつかしく思われる日は来るのだろうか。

スルタン通りの一二人の老人のうち、天涯孤独の「媽姐」と呼ばれた八九歳の黄珍老婆は、ショップハウスが壊れてこれからどうするの、という問いにこう答えている。

「みんなこんなに歳とって。お迎えが来たってこと、同じことさ」。

「すれちがい」「からほんとうの「出会い」へ

田中望（観光学部）

終戦間近い一九四二年、当時日本の植民地であった朝鮮からひとりの若い詩人が立教大学に留学している。

彼の名は、尹東柱（ユン・ドンジュ）。当時の大学の教師や学生たちは、彼と「出会った」のだろうか。

そもそも他者と「出会う」とは、どういうことなのだろうか。

写真／稲垣徳文、李垠京

OVA TOKYO



尹東柱記念館にて（ソウル・延世大学）

東京という巨大な都市圏で、われわれはさまざまな異人（他者）と日常的に接触している。たぶん接触せずには生きていけない状態にある。しかし、接触はつねに交流を生むとはかぎらない。人と人が接触することは交流の出発点であることにまちがいはないが、その接触はほとんどのところで、ほんとうの「出会い」ではない。むしろ、大半は「すれちがい」、「出会いそのこない」のではないだろうか。

立教留学時代に書かれた五つの詩篇

立教大学は、その巨大な首都圏のひとつの中心である池袋とそこに近い新座にあつて、しかも池袋周辺は首都圏のなかでも指折りの多様性とんだ街である。その立教大学に、終戦間近い一九四二年、当時日本の植民地であった朝鮮からひとりの若い詩人が留学して

きたのを知っているだろうか。現在の韓国では学校教科書にものつていて、ほとんど誰でも知っている詩人尹東柱（ユン・ドンジュ）である（この詩人の作品は、日本の国語教科書『筑摩書房編『高校新編現代文』』にも、日本人作家の文章のなかに引用されるかたちではあるが、みる事ができるので、読んだことのある高校生たちはけっこういると思う）。

日本の植民地支配下の朝鮮では、日本語による教育がおこなわれており、学校ではハンガルの使用は禁止されていたけれど、尹東柱は二六、七歳からハンガルによる詩を書きつづけた。おそらく、尹東柱自身は日本語で教育を受けていたはずだから、日本で生活も大学で勉強することも、ことばに不自由することはたぶんまったくなかっただろう。ただそれでも、尹東柱はハンガルによる詩を書き

つづけていた。

そのことを当時立教大学にいた教師たちや同級の大学生たちのなかで、知っている人間がどのくらいいただろうか。尹東柱は、立教時代に書いた詩を郵便で故郷の友人に送っていたという。彼の現在残されている詩は、「空と風と星と詩 尹東柱全詩集」（一九八四、影書房）にまとめられているが、そのうちの最後の五篇が立教大学時代に書かれたものである。しかもその原稿は、なんと立教大学の英文の便箋に書かれたものなのだ。それが『空と風と星と詩 尹東柱全詩集』の口絵写真（四ページ）としてのせられているが、そこには立教大学のマークがあり、英文で「RIKKYO UNIVERSITY」というレターヘッドがついている。

すでにアジア太平洋戦争に突入していた

この時期、紙などの物資もさほど潤沢ではなかったときに、尹東柱はどうやってこの用紙を手に入れ、それにハンゲルの詩を書いたのだろうか。立教大学の教師のだけれど、彼にあたえたのかもしれない。そのまえ、すでに前年末に真珠湾攻撃がおこなわれアジア太平洋戦争に突入していた当時の日本で、植民地出身の学生がどんな状況にあったのか、さまざまな差別を経験することもあったろう。そういふなかで立教大学にきた尹東柱が、立教大学の英文の便箋に詩を書き残したということが、当時の立教大学の学生と教師たちのあいだの親密な関係を物語っているのかもしれない。

「六畳部屋は他人(ひと)の国」

この立教大学の便箋にかかれた五編の詩は、ひそかにソウルの友人に郵便で送られた。ソウルの友人は日本の官憲の目に触れるのをおそれて、手紙の部分は焼き捨て、詩篇の原稿のみ甕（かま）にいれて床下に埋めておいたために現在に残されたものだという。ただし、五編の詩のうち、最後の、日付をもたない「春」という詩は、あやまって手紙とともに最後の部分が破棄されてしまったらしく、未完になっている。

ころにあったのだろう。そのアパートで尹東柱はおそらく六畳一間に生活し、それを「他人(ひと)の国」と感じていたのである。

根底にある力の不均衡

当時の立教大学の教師や学生たちは、尹東柱とどのような接触をしたのだろうか。ほんとうに尹東柱と「出会った」のだろうか。そのへんの事情はくわしくはわからない。立教大学には、尹東柱の在籍をしない学籍簿が残されているが、詩人尹東柱の事跡をあらわすなにかが残っているという話はきいていない。おそらく多くの教師や学生たちは、植民地朝鮮からきた学生として接触したのだろう。その当時尹東柱の詩を読んだ人が、立教大学関係者のなかにひとりでもいたのだろうか。

尹東柱という人間とほんとうに出会うためには、すくなく



尹東柱が立教大学に留学する前に在籍していたソウルの延禧専門学校（現在の延世大学）の学生寮は現在、尹東柱記念館となっており、彼の生前をしのぶ遺品の数々が展示されている。

でも読み聞かせてもらった人がいるのだろうか。そして「六畳部屋は他人の国」と詠まなければならなかった彼の想い。宗主国日本とその植民地朝鮮のはざまで、尹東柱がどう生き、どう想ったか。そうした尹東柱の肉声を聞きとつてこそ、はじめて尹東柱に「出会った」といえるのではないだろうか。それがいかぎり、尹東柱という人間と顔をあわせ、話をし、接触していったとしても、それは「出会いそこない」といふべきだろう。たぶん立教大学関係者のなかに、尹東柱のめんどろをみた人もいたにちがいない。学生のなかにも、植民地朝鮮から留学してきた尹東柱に同情し、なんらかの支援をしようとした人間もいたかもしれない。そうした接触では、おそらく尹東柱の気もちも和み、留学生活のさびしさも一時的には忘れることもできたかもしれない。当時の立教大学は小規模な大学で、学生と教師

尹東柱が立教大学にいたのは、わずか半年にすぎない。四二年の一〇月には京都の同志社大学にうつっている。そして翌年の七月一日に独立運動の疑いで逮捕され、釈放されないまま、四五年二月一六日に福岡刑務所で衰弱のため獄死している。植民地朝鮮が解放される、わずか六か月前のことである。もし彼が、あと六か月生きながらえていたとしたら、どんな詩を書いただろう。尹東柱の死は人体実験による虐殺だったという説もある。

尹東柱が同志社大学で留学生生活を送ったのも九か月あまりであるが、その間も、彼はハンゲルによる詩を書きつづけていたはずである。しかしその詩はまったく残されていない。逮捕された当時、彼のハンゲルによる詩はすべて没収され、敗戦のときに焼却されたと考えられている。そもそも尹東柱の逮捕理由は独立運動にかかわったということであったが、どのていど運動に深入りしていたのかはわからないらしい。ただそのころ、ハンゲルでものを書くということ自体が、抗日思想とみなされかねなかったのである。

『空と風と星と詩 尹東柱全詩集』に残されている最後の日付をもった詩は、立教大学時代の一九四二年六月三日という日付をもつ

「たやすく書かれた詩」という作品である。

窓辺に夜の雨がささやき

六畳部屋は他人(ひと)の国

これはその「たやすく書かれた詩」の一節であるが、この「六畳部屋」はいったいどこにあったのだろう。おそらく池袋からそんなに遠くないところなのだろう。すくなくとも東京圏のなかに任んでいたはずである。

おなじように立教時代にかかれた五編の詩のうちの一つ、一九四二年五月一三日の「美しい追憶」のなかに、

春はすでに過ぎ——東京郊外のどある静かな下宿部屋で、古い街に残ったわたしを希望と愛のように懐しむ。

とあるから、池袋からはすこしはなれたと



ソウルの延世大学キャンパス内には尹東柱の詩碑がある。

などの大学関係者とのあいだの密接なかかわりでも知られていた。その伝統は現在の立教大学にも受けつがれ、とくに観光学部のような留学生の多い学部では、日本人学生と留学生との交流がさかんである。そういう雰囲気なかで、たぶん尹東柱も立教大学関係者のなかに友達ができていたはずである。

しかしそれでも、尹東柱は「六畳部屋は他人の国」と詠んだろう。そのような接触は、日本と朝鮮の力関係、宗主国うまれの人間と植民地うまれの人間との関係を、あたりまえのこととして認めてしまつたうえで、相手にあわれみをかけるにすぎないからだ。尹東柱とのそうした接触のなかで、留学生のつらさがわかつたとか、植民地朝鮮のことを理解したかと思つた人たちもいただろう。しかしたぶん尹東柱は、そうした人に出会うごとに、むしろそういうときにこそ「六畳部屋は他人の国」と詠わねばならなかったのだ。

こうした接触はやはり「出会い」ではなくて、「すれちがい」といふべきなのだろう。そこではふたりの人間が生身でむかいあつてゐるわけではなく、おたがいに理解しあう関係ではあつても、その根底にある力の関係の不均衡をこわすようなものではない。「出会いこそ

こない」はその力関係をあたりまえのこととして、その関係のなかでのみ相手を評価し、じぶんにとって役にたつ相手であれば受け入れ、そうでなければ排除するというかわりをもつことである。「すれちがい」はより深い関係ではあるが、かわいそうだと思ふ気持ちから支援をすることはあつても、その根底の力関係を問ひなおすこととはしないで成立する関係（いわゆるバターナリズム…強者が「おまえにとつてなにがいちばんいいかは、おまえよりわたしのほうがよく知っている。だからわたしがおまえにかわつて判断してあげる」といつて弱者を援助する関係）なのだ。

真の交流文化を身につけるために

考えてみれば、観光旅行などで出会う人との関係は多くの場合に「出会いこそない」ではないし、そこに学習の要素をふくめたスタディー・ツアーであつてもせいぜいのところ「すれちがい」ではないのかもしれない。「交流」ということばはいろいろなところで安易につかわれすぎている。「国際交流」という言葉が時代のキーワードのようにつかわれ、もてはやされたのはすこし前のことになつても、現在でも「交流」ということば

は、ぎすぎすした人間社会や紛争のたえない国際社会をいやすための魔法の杖のようにつかわれている。

「多文化交流」とか「共生のための交流」とかも、おなじような魔法の杖にすぎない。そこで目指されているのはせいぜい「すれちがい」でしかないのではないか。真の意味での「交流」を考へるのであれば、「出会い」でなければならぬだろう。しかしそれは、とても困難なことなのかもしれない。

われわれはいま、真の意味の「交流」をめぐらした文化を身につけていかなければならぬ。「交流」という文化をわれわれ一人ひとりが身につけることができるかどうか、これからの社会がよくなるかどうかがかかつてゐる。そのためには、われわれの身近な生活圏のなかで、まず「交流」という文化を育てていくことが大切だろう。立教大学の池袋と新座のキャンパスは、多様な人間の混住する東京圏のなかにあつて、そのための自己訓練には最適のところだろう。

立教大学観光学部にできる交流文化学科は、そういう「交流」という文化を育てるための核になるはずのところである。立教大学はいま学部の数も増え、徐々に大規模化しており、

学生と教師など大学関係者とのあいだの親密な関係がうすれつつある。交流文化学科は、以前の立教大学のもつていたアットホームな関係をとりもどす場所であつてほしい。そこでは他者と「出会いこそこねる」のでもなく、「すれちがい」のでもない、ほんとうの「出会い」ができる場所であつてほしい。交流文化学科の学生たちがそういう「出会い」の力を身につけ、そしてそれを広げていくことこそ、日本社会を多文化化していく原動力になるのだと思う。

東京首都圏には、留学生などの外国人ばかりではなく、アイヌの人びと、沖縄の人びと、いわゆる被差別部落の出身者たち、国籍のみを異にする在日韓国・朝鮮人たちもいる。外国人のなかには難民の認定を求めて、日本で不安定な立場で、裁判を闘つてゐる人たちもいる。精神・身体・知的障害をもつてゐる人たち、エイズなどの特殊な病気をもつてゐる人びともおおぜいいる。しかしその多くはまだ顔の見えない他者である。「交流」という文化を育てていくためには、まず自分たちの足元からこうしたさまざまな異人（他者）を発見することからはじめなければいけないだろう。



立教大学の便箋にハングルで書かれた詩

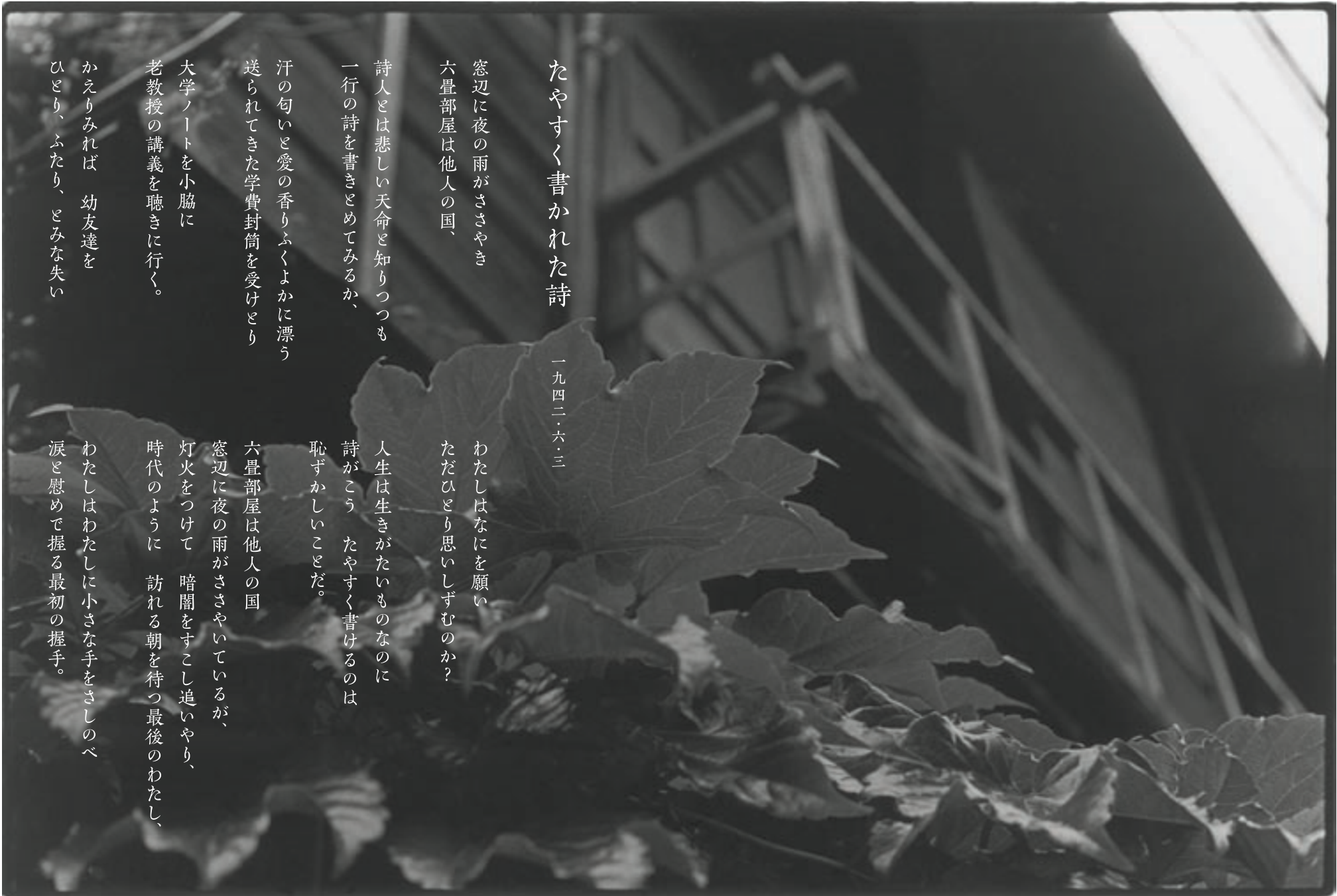


「空と風と星と詩」(影書房一九八四)



尹東柱(ユン・ドンジュ)

一九一七年二月三〇日、当時満州と呼ばれていた中国東北部間島省(現在の吉林省延辺朝鮮族自治州)の明東で生まれる。一族は敬けんなキリスト教徒。三八年ソウルの延禧専門学校(現在の延世大学)文科に入学。この時期、全国紙の「朝鮮日報」などに作品を発表する。四二年三月立教大学文学部英文科に入学し、約半年を過ごす。この時期に書かれたのが「たやすく書かれた詩」である。同年一〇月同志社大学に転入学。だが、四三年七月京都警察署により独立運動の嫌疑で逮捕される。懲役二年の判決を受け、福岡刑務所で服役中の四五年二月一六日獄死する。没後三年の四八年、遺稿を集めた詩集「空と風と星と詩」がソウルで刊行される。



たやすく書かれた詩

一九四二・六・三

窓辺に夜の雨がささやき

六畳部屋は他人の国、

詩人とは悲しい天命と知りつつも

一行の詩を書きとめてみるか、

汗の匂いと愛の香りふくよかに漂う

送られてきた学費封筒を受けとり

大学ノートを小脇に

老教授の講義を聴きに行く。

かえりみれば 幼友達を

ひとり、ふたり、とみなしい

わたしはなにを願う

ただひとり思いしずむのか？

人生は生きがたいものなのに

詩がこう たやすく書けるのは

恥ずかしいことだ。

六畳部屋は他人の国

窓辺に夜の雨がささやいているが、

灯火をつけて 暗闇をすこし追いやり、

時代のように 訪れる朝を待つ最後のわたし、

わたしはわたしに小さな手をさしのべ

涙と慰めで握る最初の握手。



秋田の農村観光調査

旅する人物像を創造する

立教大学観光学部 村上研究室



村上研究室では、実際に秋田の農家や商家に泊まり込み、住民との交流を深めながら調査を行っている。

立教大学観光学部村上研究室では、この一〇年間継続して秋田県仙北郡（角館町、田沢湖町、西木村）で農村観光（グリーンツーリズム）調査を行っている。

十和田八幡平国立公園に指定される田沢湖を有する田沢湖町など観光資源にも恵まれたこの地域は、年々人口が減少傾向にあり、高齢化も深刻で、総人口の二〇%以上が六五歳以上である。若い世代の農業人口も減り、都市部への人口流出が見られるという意味でも、日本の農村地域が抱える典型的な問題を有している。

こうした地域でいかに観光が成立するかを考えると、従来の観光地計画のための調査は有効ではない。そこで、村上研究室では、農村観光の大きな魅力である「ふれあい」を主眼に置き、「ふれあい」から導かれる旅行者と受け入れ側に生じる感情がどのようなものなのか、実際にこの地域の農家や商家に泊まり込み、住民との交流を深めることを通して調査するという方法を採用している。そして、旅行者が「こうした「ふれあい」

型観光になぜ魅力を感じるのか、分析を続けてきた。

二〇〇四年度の調査では、こうした継続的な調査の次なる展開として、「角館町、田沢湖町、西木村を旅する人物像を創造する」すなわちこの地域を旅する理想的な人物像とはどのようなものなのかを、調査を通して抽出したデータにより再構成し、つくりあげるという作業に着手した。こうした理想的な人物像を描きあげることが学生ばかりか地元の人々も巻き込んで行うことこの地域の魅力を立教大学、農村、町との交流の中から再発見しようと考えたのである。

調査合宿中、各ゼミ員は「農家体験」「商家体験」「茶飲み友達」という三つのキーワードからこの地域での住民との交流体験やそのとき生じた感情を記述した。合宿終了後、そのデータは再構成され「回想録」としてまとめられた。その内容は「二〇〇四年度村上研究室三年専門演習報告書「角館、田沢湖、西木を旅する人物像の創造」に収められている。



調査場所

秋田県仙北郡（西木村、角館町、田沢湖町）



角館武家屋敷通り

© 秋田県産業経済労働部 観光課

グリーンツーリズム

一般に農村での滞在型余暇活動を指すが、こうした利用者に宿泊サービスを提供する民宿経営など農家が行う観光的活動も指す。我が国では農林水産省が農山村地域活性化の重要な手段として1992年より提唱し、95年には通称グリーンツーリズム法（農山漁村滞在型余暇活動促進法）が施行された。西ヨーロッパなどでは長い歴史を持ち、パカンスの一形態として定着している。



調査合宿中、地元の方々との交流のため、秋田弁講座やそば打ちなども行われた。「農家体験」では、農家に泊まり込み、農作業の手伝いをしながら、家族との会話をを行った。

調査合宿を終えて——参加学生の声

私が村上ゼミを選んだのは、自分自身が農村の出身者なので、自分にとっては生活の場であった農村を観光対象として捉えるという視点にとっても興味を持ち、面白いと思ったことがきっかけでした。農村は過疎化や高齢化という問題を抱えており、観光を通して地域を活性化し、現地に住んでいる人たちの希望や生きがいにつなげるための方法を学ぶことが目標です。

秋田での調査合宿では、現地の方々と交わす会話一つひとつが印象的でした。観光客相手の会話というよりも、みなさんの普段の会話にそのまま混ぜていただいているようで、とても親しみを感じました。

(観光学部4年・大澤瑠衣)

ゼミの先輩から普段の生活とはまったく異なる体験ができると聞いていたので、合宿に参加するのがとても楽しみでした。何より面白かったのは、お世話になった商家の方や「茶飲み友達」調査(午後3時に調査に訪れることから名付けられた)で訪問したおじいちゃんやおばあちゃんと話ができただけです。商家では祭りに対する地元の方々の熱い気持ちを、「茶飲み友達」ではおじいちゃんとおばあちゃんの二人のなれそめや昔の生活などをうかがい、自分とは異なる環境や地域に住んでいる年齢も離れた方々の話を通して様々な価値観に触れることができました。

秋田弁を勉強できたことも面白い経験でした。調査の前に行った秋田弁講座で秋田弁を少し習ってから「茶飲み友達」調査に行ったのですが、最初はおじいちゃんやおばあちゃんが話している言葉がほとんど理解できませんでした。ゆっくり話していただいたり、身振りなどでなんとか内容はわかったのですが、まるで外国語のように思いました。その後、覚えてた秋田弁を使い会話ができるときはうれしかったです。「英語のように秋田弁話せるよ」と友達に言うたびつくりされ、ちょっと自慢です。

(観光学部4年・田村和枝)

ゼミ合宿日程

2004年9月12日～17日

12日	東京発
13日	角館到着 午前 秋田弁講座 午後 「茶飲み友達」宅訪問
14日	農家体験 商家体験
15日	同上
16日	「茶飲み友達」研究発表会 そば打ち体験 懇親会
17日	終了

研究調査を通じた都市農村交流の実践

村上和夫(観光学部)

日本の農村観光は大正や明治末期にまで遡ることができのですが、一九七〇年代にスキー場開発など、施設開発と経済効果に注目が集まり過ぎたため、観光客について漠然と「都市住民」「都市生活者」「消費者」という言い方をするだけで、彼らの属性分析が十分に行なわれなまま今日を迎えています。これまで日本の観光事業の研究では、事業の計画や方法論が重視される傾向にあり、「旅行者が観光を楽しむ方法」についての研究は少なかつたといえます。

ところが、今日の日本では農村においても少子高齢化が進む反面で、都市と農村の生活感覚も均質化しています。こうしたなか、従来の地域振興の手法ではなく、旅行者が地域社会の生活に関心を持ち、ある程度参加することができ、地域社会側の生活感覚と消費環境を住民とともに共有し、交流を通じて新しいものに創り変えていくような都市農村交流のあり方が求められています。

村上研究室では、この一〇年間秋田県仙北郡で農村観光調査を継続的に行っています。毎年学生たちは同地を訪ね、地域住民との交流を通して農村観光の魅力を調査してきました。それはまた「旅行者が観光を楽しむ方法」を新たに創造する研究でもありました。

二〇〇四年度、学生たちは秋田での自分たちの交流体験を「物語」として再構成することに取り組みました。農村地域を訪れる旅行者は地域社会をめぐる旅行行動に積極的に自分自身の理由を見つけようとはしますが、これは自分を主人公にした旅の「物語」を描き、それに沿って旅行を消費するということでもあります。

こうした旅行を通じて自分を主人公とする「物語」を創り出しそれを楽しむ「物語の消費」の中で、旅行者と地域住民はどのような役割を持ち、それぞれが観光地をどのような自己表現の場としたらよいのかを考えることは、農村観光の将来にとっても大きな意味を持つといえます。それと同時に、研究調査を通じた学生と地域住民の交流が新しい都市農村交流の実践になっているのです。

読書案内

特集テーマに関係のある書籍の紹介は、マレーシアの漫画作品。

青春グラフィティに描かれるマレーシアの民族間交流

カンポンのガキ大将

ラット作
荻島早苗・末吉美栄子訳 晶文社（一九八四）



本号の特集で紹介されたマレーシアの「Kopitan」の世界や日常生活の中で異なる民族どうしの交流といった事柄に興味を持たれた読者にお勧めしたいのが、マレーシアの漫画家ラットの作品だ。

彼は一九五一年ペラ州のカンポンに生まれ、高校卒業後、マレーシア

最大の英字新聞社ニューストレイツ・タイムズに入社。時事マンガで圧倒的な人気を得た、マレーシアを代表する漫画家である。

特集でも言及されているように「カンポン」とは、マレー語で村落を意味する。これら二つの作品は、マレーシアにおける村落と都市それ

ぞれの人々の暮らしを作者ラット自身の自伝スタイルで実に生き生きとわれわれに伝えてくれる。そのカンポンもいまではラットが生まれ育った時代とは大きく様変わりしており、作品はかつてのカンポンを知るうえでも貴重なものだ。

『The Kampung Boy (邦題『カンポンのガキ大将』)では、マレーシアのペラ州の錫の産地のあるカンポンを舞台に、マレー人の主人公の誕生から物語が始まる。誕生、コーラン塾への入塾、そして割礼、とさまざまな通過儀礼を経験しながらマレー人の少年は成長する。カンポンでの日常生活はマレー人の世界だが、月に一度彼は父親と一緒に近くの町へ買い出しに出かけ、いつも買物をする華人の雑貨店やインド人の食堂などで外の世界での他民族との交流を経験する。その後、少年は試験に合格し、全寮制の学校に入るためカンポン＝故郷を離れる。

続編に相当する『Town Boy』では、全寮制の学校に入るためにカンポンを離れた後、一家が移り住んだイ

ポーという都市での新たな生活、そして少年から青年へと成長してゆく中でのさまざまな経験が描かれている。活気溢れる賑やかな都市イポーでは民族どうしの交流が日常生活そのものだ。

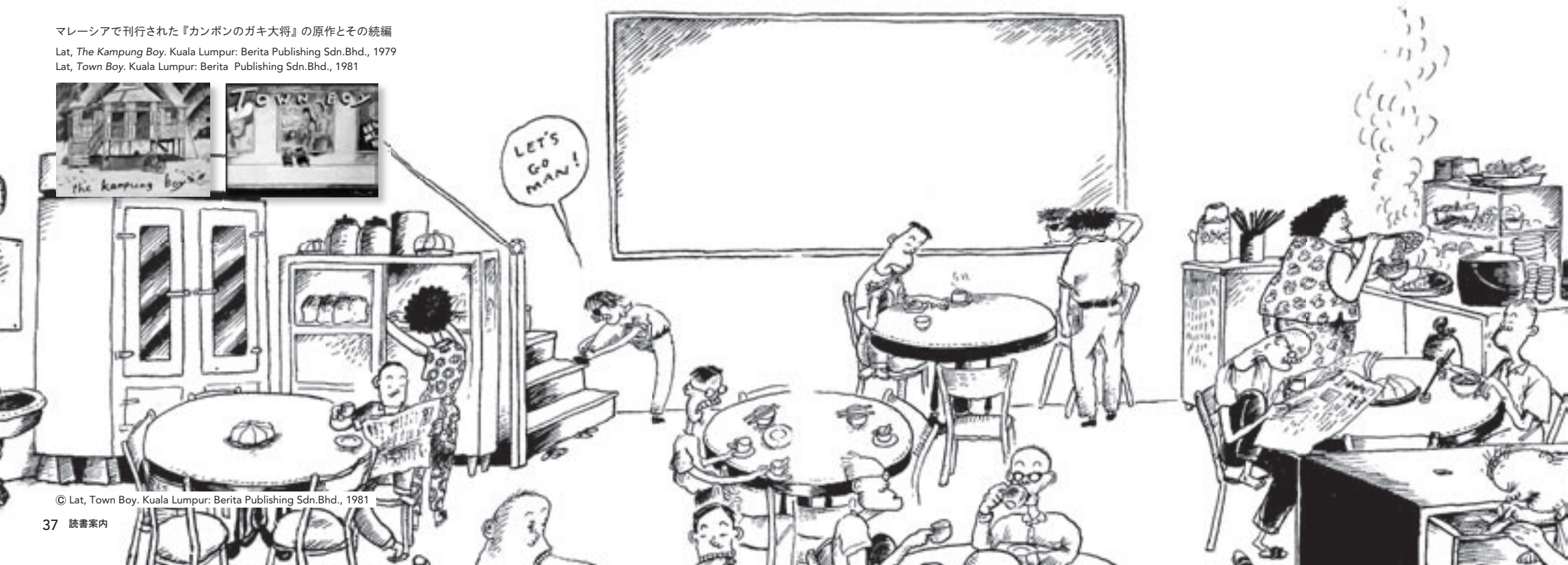
主人公はそこで華人の少年フランキーと出会う。フランキーの家は、ショップハウスの典型的な「Kopitan」。マレー人の主人公にとってフランキーの家に遊びに行くことは異文化体験そのものだった。その後二人は親友になり、青年へと成長する。学校のマドンナへの淡い恋、そして親友フランキーとの別れ、ロンドンへ留学するフランキーを見送りに駆けつけたイポー駅で物語は幕を閉じる。

マレーシアの現地の状況に通じていないとわかりにくい部分も若干あるものの、全編を通して人々の暮らしぶりの描写は特徴をきわめて的確に捉えており、現地の空気がよく伝わってくる。ユーモア溢れる描写の中に思わず涙がにじむマレーシアの青春グラフィティそのものだ。

マレーシアで刊行された『カンポンのガキ大将』の原作とその続編

Lat, *The Kampung Boy*. Kuala Lumpur: Berita Publishing Sdn.Bhd., 1979

Lat, *Town Boy*. Kuala Lumpur: Berita Publishing Sdn.Bhd., 1981



© Lat, *Town Boy*. Kuala Lumpur: Berita Publishing Sdn.Bhd., 1981

旅の出版社をいかに立ち上げたか

観光学部主催の「アジアの旅を書く」連続講演会の第三弾では、バックパッカーとしての自らの旅の体験をつづる旅行作家として、また海外個人旅行者のための旅行情報誌『旅行人』編集長として、幅広く活躍中の蔵前仁一氏にご講演いただいた。

『旅行人』はこうして生まれた、個人旅行者向け旅行誌の生い立ちから現在まで」
蔵前仁一
二〇〇四年二月一〇日
池袋キャンパス
八号館八〇一教室

バックパッカーに定義はない

ぼくのやっている旅行のスタイルは、いわゆるバックパッカー。もともと「リュックを背負って山を歩く人」という意味だったこの言葉を世に広めたのが、「ロンリープラネット」というガイドブックシリーズを立ち上げたオーストラリア人のトニー・ウィラーです。海外で出会う欧米人の旅行者は誰もが手に

持っている、世界でもっとも有名なガイドブックと言っているでしょう。日本でこの言葉が使われるようになったのは、一九七六年創刊の『ポパイ』くらいからじゃないでしょうか。でも、実際はバックパッカーという言葉の定義はほとんどないと思う。個人旅行、それ以上の確たる定義はない。ただ、若くて海外をフラフラしている、薄汚い恰好で……というイメージかな。それを決定的にしたのが、猿岩石。

ぼくが初めて海外旅行したのは大学卒業後、グラフィックデザインをしていた一九七九年のことで、行き先はアメリカ。約二か月弱の旅

でした。それでも当時は個人旅行者はほとんどいなかった。いるのは、留学生か芸術家志望といった感じ。まだ一ドル二四〇円の時代です。しかもLAまで往復チケットが二五万円。大卒の初任給が一〇万円くらいですから、かなり高かった。だから、学生時代は海外旅行なんて興味の範囲外だった。ところが、数年後、大きく変わった。八〇年代に入り、今に続く海外旅行のブームが始まったんです。

創刊のきっかけはパソコン購入から

その後、ぼくはインドなどあちこちを旅行するようになった。『ゴーゴー・インド』（凱風社）などの本も書きました。そして



一九八八年、『遊星通信』という同人誌をつくったんです。最初は五〇部ほどつくって、知り合いに勝手に送りつけました。そして、口コミで会員を増やすよう頼んだのです。自分の本のとがきに会員募集をしたりもしました。なぜつくろうかと思ったかというところ、その年初めてコンピュータを買ったからです。NECのPC9801。ようやく出始めたところで五〇万

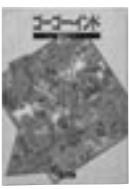
円近くした。妻の車を売って買ったんです。当時はまだ活字を打つには和文タイプしかなく、自分の打った活字がそのまま印刷されるのは画期的！感動でした。それが『遊星通信』をつくった最大の動機。（旅の雑誌をつくらうと考えていたというより）ミニコミをつくらうとしたらネタは何にしたらいいかと考え、自分が旅行ばかりしてきたからそれにしよう、と。まあそれくらいの理由だったのが真相です。もともと、これからバックパッカーも増えるだろうとの予感があった。すでに『地球の歩き方』はあったけれど、もっと詳しい個人旅行者のための情報をほしがっている人は

蔵前仁一と『旅行人』の歩み

- 1979 初めての海外旅行。アメリカへこの年『地球の歩き方』創刊される
- 1983 約1年間のインド旅行へ
- 1986 『ゴーゴー・インド』（凱風社）刊行
- 1988 『遊星通信』創刊
- 1989 約2年半のアジア・アフリカ旅行へ一時休刊
- 1992 帰国後、『遊星通信』復刊
- 1993 『ゴーゴー・アフリカ』、『アフリカ旅行情報ノート』（凱風社）刊行月刊『旅行人』に誌名変更
- 1995 有限会社旅行人設立『メコンの国旅行情報ノート』刊行ガイドブック「旅行人ノートシリーズ」創刊
- 1996 『旅のグ』をはじめ連載陣の単行本を多数刊行
- 2004 季刊『旅行人』にリニューアル



『遊星通信』



『ゴーゴー・インド』



『旅行人』



『アフリカ旅行情報ノート』



『旅のグ』(フレイゴリ青山著)



『メコンの国旅行情報ノート』

蔵前仁一が選んだエポックメイキングな

「旅の本」

「かつて本が自分を含め旅行者に与えた

影響は大きかった」と蔵前氏は語る。

以下は、講演の中で蔵前氏が挙げた

エポックメイキングな「旅の本」。

蔵前氏が旅のメディアを立ち上げたのも、

こうした本との出会いがあったからだろう。

1976



オデッセイ

グループ・オデッセイ

日本初のバックパッカーのための海外旅行情報誌。「パキスタンやバングラデシュなど意欲的な特集が並んでいた。ただ、ある意味早過ぎた雑誌だったとも言えるかも」。現在は休刊中。

1979



地球の歩き方

ダイヤモンドビッグ社

ロンリープラネットに遅れること2年。創刊当初は個人旅行者の投稿による実体験情報がメインコンテンツだった。「ほくも『地球の歩き方』を見て初めて個人旅行ってできるんだと知った。パスポートやビザは自分で取れるというところを知ったのもそうだし。ちょうどアメリカに行く年に創刊されたことは大きかった」。

1983



スーパーアジアガイド

JICC出版

JICC出版が創刊した読み物主体のアジアガイドシリーズ。「屋台のおぼちゃんやタイのキックボクサーのインタビューなどが載っていて、ガイドブックとしては使い物にならないが、とにかく面白かった」。蔵前氏もイラストレーターとして制作に参画。

1961



何でも見てやろう

河出書房新社（普及版は講談社文庫）

小田実 著

元祖「アジア横断旅行」の記録。当時は大ベストセラー。日本人の海外旅行自由化が1964年だから、それ以前に書かれたことに意味があった。

1977



Southeast Asia on a shoestring

Lonely Planet

Tony Wheeler 著

「ロンリープラネット」を創刊したオーストラリア人トニー・ウィラーが刊行した「わずかな金で東南アジアへ」がテーマのガイドブック。英語圏を超えて爆発的なヒットとなった。「ロンリープラネット」シリーズの原形といえる。

1981



全東洋街道

集英社（普及版は集英社文庫）

藤原新也 著

写真家によるアジア横断旅行の記録。「とにかくスタイルが斬新だった。写真を撮りながら哲学的な思索をし、きわめて個人的な世界観でアジアを旅するというのが、これ以後一時、藤原新也の影響を受けたような旅人が増えたと思う。暗い写真を撮る人たかなんだけど…」。

1986



深夜特急

新潮社（普及版は新潮文庫）

沢木耕太郎 著

「1970年代の20代の青年のアジア横断旅行の記録である『深夜特急』は、なぜ今も読みつがれるのだろう。思うに、それは旅に確たる目的意識がなかったことではないか。それこそが元祖バックパッカーの旅だといわれるゆえんかもしれない」。

すだから、続けていったら面白いんじゃないかと思っただけです。

日本版「ロンリープラネット」をつくりたい

こうしてミニコミを続け、自分の旅の本を書いたりしながらも、九〇年代に入ると、ぼくはアフリカに約二年半をかけて旅行に出ました（その旅については『ゴーゴーアフリカ』参照）。

帰国して『遊星通信』を復刊し、翌年の九三年、旅先で集めた情報を元に『アフリカ旅行情報ノート』（凱風社）をつくりました。当初はそんなに売れるはずがないと思って出したら、意外によく売れた。初刷が二〇〇〇部、定価は八七〇円。普通は書店から返本があるのに、まったく戻ってこない。それで五〇〇部増刷を何回か繰り返した。

いま思えば、それくらいアフリカに関する情報はなかったんだと思う。ただ当時は出版の知識がなかったため、後で計算したらあれだけ増刷したにもかかわらず収支は赤字だったことが判明しました。

それでも、ぼくはこの成功のおかげで、出版社をつくる気になったことは事実です。その年、『遊星通信』を現在の『旅行人』に誌名変更しました。日本でも「ロンリープラネット

ト」のようなガイドブックをつくりたいと思っただけです。

ぼくはグラフィックデザイナーとして仕事をしてきたから、自分で原稿を書き、デザインしたものを印刷所に渡せば本は

自然と出来上がる。本というのはひとりか二人いれば誰でもつくれるわけです。しかし、問題はつくった本をどう売るか。どうやって書店に配るか（ディストリビュート）が大変なのです。本屋に販売してもらうためには、取次会社を通さなければなりません。でも、一般に取次会社は小さな出版社とはすぐには契約してくれないものなんです。出版社を立ち上げる前にいろいろな人に相談しましたが、それが大きな壁だと言われた。

ところが、なぜだかわからないけど、日版（日本出版販売株式会社）に行くこととあつさり「いいですよ」と言われた。こうしてあれよあれよという間に出版社になった。九五年のことです。これは本当にたまたまそうになったとしか言いようがないんです。なかには三

年も四年も実績をつくらなければ、取次してくれない出版社もあるというのが業界の常識だったのですから。

最近の若い人は旅に出なくなりました？

その後、「旅行人ノート」というガイドブックを創刊しシリーズ化したり、『旅行人』の連載執筆陣などの本を出版しました。「旅行人」でデビューし、他の出版社などで活躍する人たちも出てきました。

ところが、九〇年代後半頃から出版不況が叫ばれるようになり、本が売れなくなりました。状況を劇的に変えたのはインターネットでしよう。旅の情報はガイドブックではなく、インターネットでバンバン取ってこられるようになった。これではうちのよう

最近の観光学部講演会

開催日	講演者	演題	対象
4.6	新倉武一 財団法人 日本交通公社 専務理事（当時）	観光の魅力およびその可能性	観光学部学生
5.27	伊藤伸平 『地球の歩き方』編集者	『地球の歩き方』をつくる	本学学生、 本学教職員、一般
6.28 29 30	シドニー・チェン 香港中文大学人類学系 準教授	エスニックツーリズムから ヘリテージツーリズムへ	観光学研究科院生
6.30	シドニー・チェン 香港中文大学人類学系 準教授	日常世界から観光を発想する	観光学部学生
7.1	桜井幹男 『トラベルジャーナル』編集長	業界誌から見た旅行ビジネス 〈現在・過去・未来〉	本学学生、 本学教職員、一般
7.11	張玉鈞 北京林業大学副教授	中国のグリーンツーリズムの現状と課題	観光学部学生

予定

開催日	講演者	演題	対象
7.30	新倉武一 財団法人 日本交通公社 会長	旅行業の現状と今後のあり方	本学学生、 本学教職員、一般
10.24	保継剛 中山大学教授	ドイツと 中国のテーマパーク開発	本学学生、 本学教職員、一般
10.25 26	保継剛 中山大学教授	観光開発への地理学アプローチ（仮）	観光学研究科院生



蔵前仁一 氏

（くらまえ・じんいち）

季刊『旅行人』発行人兼編集長。
1956年鹿児島生まれ。慶応義塾大学卒業後、グラフィックデザイナーに。アジア、アフリカを中心に世界各地をバックパッカーとして旅し、その経験を著書として出版するばかりでなく、旅の専門出版社（有限会社旅行人）を立ち上げ、多くの旅の書き手を発掘。個人旅行の楽しさや面白さを広めた旅行作家の第一人者。著書は『新ゴーゴー・インド』『新ゴーゴー・アジア』『旅ときどき沈没』『インドは今日も雨だった』『旅で眠りたい』『いつも旅のことばかり考えていた』など多数。

ブックを出している出版社は苦しくなる。しかも、これまで海外旅行の担い手だった若い人たちが、以前に比べあまり海外に出なくなつた。統計を見ても明らかのように、日本人の海外旅行者に占める五〇代以上の比率が上がっています。確かに、最近ではアフリカに行つてもかつてのように日本人バックパッカーはほとんど見かけなくなつた。いまどきバックパッカーをしているのは韓国人の若者に入れ替わりつつあるようです。

います。海外に出れば何か面白いことがきつとあるんじゃないか、というような強烈な好奇心が昔はあつた。でも、今では海外旅行は特別なものでも何でもなくなつていいる。本場のところはばくにはよくわかりません。そういうえば、アメリカ人などは、確かに日本人より少し早い時期に海外旅行への関心が低くなつてしまつたように見えた。

海外や異文化に対する憧れが減つてしまつたということなのか、別に行かなくてもいいや、と若い人たちは思うようになったのかなあ。最近、ちよつとそんなことを思うことがあるんです。

質疑応答から

講演終了後も活発な質疑応答が繰り広げられた。その一部を収録。

Q 蔵前さんの「T」に対するスタンスは？
A まつたく取り組む気はありません。そんなことやつても旅はちつとも面白くならないから。いずれガイドブックの機能は「T」に移行していくと思えます。旅先の宿や交通情報はそれで充分でも、自分はどういうことをやりたいとは思っていません。

Q 「旅行人ノート」にはなぜ写真が少ないのでしょうか？
A 市販されている一般のガイドブックはカラー刷りで写真がいっぱい載っています。それは海外と比べて日本のガイドブックの特徴だと思います。だから、ほくも取材に行つたライターにはなるべく写真を多く載せてほしいと言つただけれど、彼らは限られた紙面の中で写真と情報のどちらを優先するかというと、結局、情報を優先しがちなんです。

Q 以前の『旅行人』はバックパッカーのためのコミュニケーション雑誌といった感じだったのですが、リニューアルで内容が大きく変わった理由は？
A 現実的な言い方をすれば、月刊から年四回発行の季刊誌へのリストラクチャリングです。でも、月刊時代は記事の半分は連載、特集が一〇ページほどの構成で、一〇年間じつも思っていたのは、ひとつの特集テーマをもつと掘り下げてカラーでやりたかつたということです。内容的に中高年が読めるようにしたのは、自分が中高年になつたから。自分の読みたい雑誌をつくりたいということ。要は、薄っぺらな月刊誌ではなく、つっこんだ記事の載つた雑誌をつくりたかつたんです。今は六〇%くらいの満足度かな。

Q 今後はどのくらいのペースで旅に出るつもりですか？
A 季刊になつたので、一年に三回くらいは出られるかなと思つています。一回に長くて二週間から一か月くらいかな。本音を言うと、月刊を続けていたら旅に出られない。だから、季刊化したんです。

Hawai'i 観光資源としての common pool resource とは何か

小沢健市 (観光学部)



2004年春から1年間の在外研究でホノルルに滞在した小沢教授の報告は、ハナウマ湾の保全・保護のために市議会が採用した管理施策についての考察。

二〇〇四年四月八日、私はハワイ大学で「環太平洋島嶼域における観光のインパクト」について研究するために、成田空港を発った。

ホノルルでの生活にも慣れてきた滞在数か月後のある日、ある論文を探すため、私は自分の所属するハワイ大学旅行産業経営学部に設置されている sunset reference center へと赴いた。お目当ての論文を探しながら観光研究に関するある専門雑誌の目次に目を通しているとき、一つの論文が目にとまった。その論文の要約に目を通すと、そこには重要な観光

対象としての景観等を形成する資源の多くは、common pool resource (共有資源) と呼ばれているが、それらの資源に関する観光研究者による研究は始まったばかりであり、今後それらの資源に関する理論的研究やケース・スタディへの取り組みが望まれるということが述べられていた。

燈台下暗し

この論文との遭遇後、私は重要な観光資源としての common pool resource とは何か、そ

の経済学的研究は存在するのか、そしてその研究のフロンティアでは何が問題になっているのか、といったことが脳裏から離れず、研究課題もそつちのけで、インターネットや図書館で common pool resource に関する文献を探し始めた。

そして私が入れた common pool resource を扱った代表的な観光および経済学のいくつかの論文と数冊の書物を読み終えてしばらく経った後、それも帰国数か月前、ハワイ大学経済学部にも所属するある教授の著書

『Tourism and the Economy』(2004)を読み始めてしばらくしてから、その書物の中に、ハナウマ湾に関する論文が存在し、しかもその教授が論文の著者の一人であることを知った。

私は迷惑をも省みず、論文の著者に「ハナ

ウマ湾に関するあなたの論文を読みたい」との趣旨の e-mail を送った。数日後、著者は多忙にもかかわらず、私に論文のコピーを手渡してくれた。

著者から手渡された論文を数日かけて読んだ後、私は「燈台下暗し」とはよく言った

ものだ、とつくづく思ったものであった。というのは、ハナウマ湾はまさに common pool resource と呼んでもよい重要な観光資源であると同時に、海洋生態系の重要な研究フィールドであったこと、その論文の著者が偶然にも私の滞在先のハワイ大学の教授であったこと、そしてハナウマ湾自体が

私の住居から目と鼻の先にあるダイヤモンド・ヘッドの向こう側に位置していたからである。

「共有地の悲劇」

ところで、「ハナウマ湾」という名前は、ワイキキ(ハワイ州ホノルル市)を訪れたことがある人ならば、誰もが知っている有名なビーチである。ハナウマ湾は、正式には「ハナウマ湾自然公園」(Hanalei Bay Nature Park) と呼ばれ、ワイキキからさほど遠くない場所に位置することもあり、訪問者のみならず地元の人々にも人気のある海



ハナウマ湾 ©オアフ観光局

洋スポットとなっている。湾内の海中には四〇〇種を超える海洋生物と珊瑚が生息し、海水の透明度の高さと波が穏やかなために、日光浴や海水浴をはじめ、シュノーケリングの格好のスポットとなっているのみならず、海洋生物や珊瑚の研究の貴重なフィールドともなっている。

しかし、問題はハナウマ湾およびその海中



ハナウマ湾の入口近くに資料館があり、生態系など同湾の環境に関するビデオ上映などが行われている。

に生息する貴重な数百種の魚類や海洋生物および珊瑚礁は、人々の自由な利用に任せておくならば、いずれビーチはゴミで一杯になり、海水は排水で汚染され、その生息が脅かされることになることは明らかであった。というのは、common pool resource ないし共有資源とは、人々のその利用（消費）を排除することが極めて困難で、かつ利用（消費）におけ

る競合性（誰かが利用すると他の人の利用可能性は減少する）という属性を有する資源を指しているからである。このような属性を持つ資源（財）は誰もが自由に利用可能であるために、過剰利用の結果、資源の質の低下や劣化や破壊が生じ、最終的には枯渇してしまうことが多い。

換言すれば、共有資源ないし common pool resource は、その資源（財）属性のために、G・ハーディンの言う「共有地の悲劇」が生じ、最近発展目覚ましいゲーム理論的に言えば「囚人のジレンマ」が生ずるということ、それゆえ人々の当該資源（財）の自由な利用を放置しておけば、貴重な資源の持続可能な利用が脅かされるということの意味している。

ハナウマ湾の管理運営施策

ハナウマ湾の管理運営施策として、ホノルル市議会は当初、「非価格割り当て」方式を採用した。それは、①ハナウマ湾への入場制限、②利用者の教育、そして③湾内の施設の改善であった。このような市の施策は、入場制限は「早い者勝ち」が基本であり、そのため個人や訪問者の利用を不利にすること、利用者の教育や施設の改善のための必

要な費用を賄うための収入源を欠いていたこと等の理由から、非効率な管理運営方式であった。

このような批判を回避するために、ホノルル市議会は、一九九五年五月「ハナウマ湾自然公園の入場に対して入場料および代価を課すこと」という条例を可決した。その条例には、①二三歳以上のハワイ州非居住者一人当

たり五米ドルを、そして②ビーチ手前まで送迎する商業用自動車やタクシーにも、その乗客定員数に応じて、一回当たり五米ドルから三五米ドルを課すという内容が盛り込まれていた。

料金徴収は、一九九五年七月から開始されたが、その後、ホノルル市議会を始め、旅行社やタクシー会社から、この条例に対する反対の声が上がった。料金徴収開始の半年後、あるホノルル市議会議員が新たな法案を議会へ提出した。

その法案は、湾内の駐車場に三〇分以上駐車するすべての自動車に一律一米ドルを課し、ビーチへの入場料金として、一三歳以上のハワイ州非居住者には三米ドルを課すこと。さらに徴収された料金収入は、①ハナウマ湾保護区に関する教育およびオリエンテーションプログラムの実施、そして②保護区の収容力研究への利用、③週一日の湾への立ち入りを禁止する（現在、火曜日は終日原則として湾への立ち入りは禁止されている）という内容が盛り込まれていた。この法案は、一九九六年四月一〇日に議



ハワイ大学旅行産業経営学部
School of Travel Industry Management, University of Hawaii at Manoa

決された。この法案は、一九九六年四月一〇日に議

会を通過し、現在に至っている。

しかし、ここで興味があることは、ホノルル市が採った「ハナウマ湾自然公園」の保全・保護のための管理施策である。すなわち、当初の非経済的な直接的な入場規制から料金徴収による経済的規制への政策変更はなぜ行われたのかということ。そして施策自体が「効率」基準を満たすのかどうかということ。さらに、いずれの条例にも、ハワイ州居住者はすでに税金という形でハナウマ湾の保全・保護に貢献しているという理由から、居住者にはビーチへの入場料金は課さないという利用者間での「公平」の基準を満たしているのかどうかの三点である。仮に読者が政策担当者であったとするならば、観光資源のみならず研究対象としても重要な common pool resource としてのハナウマ湾の適切な管理運営のために、どのような施策を講ずるであろうか。

（ハナウマ湾自然公園のホノルル市の管理運営の経緯については J. Mak and J. E. T. Moncur, "Political Economy of Protecting Unique Recreational Resources : Hanalei Bay, Hawaii," *Ambio*, Vol. 27, May 1998, pp. 217-223 を参照した）

RIKKYO
UNIVERSITY
PRESS

立教大学出版会

活字の森へ、知の大海へ

源氏物語の性と生誕

王朝文化史論

小嶋菜温子（文学部教授）〔著〕

物語論の現在、平安王朝の社会と文化が産み出した物語の歴史の意義を問う。『源氏物語』の性と生誕を媒介として日本文学史・文化史の把握にとつて不可欠な物語論・王朝文化史論に挑戦する意欲的な試み。

A5版／上製 定価7600円＋税
ISBN4-901988-04-2 C3093



立教大学出版会

〒171-8501 東京都豊島区西池袋3-34-1

Tel.03-3985-2610 Fax.03-3985-0279

http://www.rikkyo.ne.jp/grp/u-press/

発売 有斐閣

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-17

Tel.03-3265-6811 Fax.03-3262-8035

http://www.yuhikaku.co.jp/



フランス現代詩の風景 イヴ・ボヌフォワを読む

小倉和子（観光学部教授）〔著〕

現代フランスを代表する詩人、イヴ・ボヌフォワにおける「風景」の詩学。長くボヌフォワに親しんできた著者ならではの透徹した読解、そして詩論、原文と対訳を織り込んで、詩の美しさを読者に届けたい。

四六判／上製 定価2500円＋税
ISBN4-901988-01-8 C1098

次号予告

2006年1月刊行予定

特集

交流が生む 食のかたち

交流文化

02

2005年7月10日発行

発行人 稲垣勉
編集人 大橋健一

デザイン 望月昭秀
印刷 こだま印刷株式会社

問い合わせ先

立教大学観光学部

〒352-8558 埼玉県新座市北野1-2-26

TEL 048-471-7375

http://www.rikkyo.ne.jp/grp/tourism/

*本誌掲載記事の無断転載を禁じます。

©2005 Rikkyo University, College of Tourism. Printed in Japan.

執筆者紹介 (50音順)

大橋健一

（おおはし・けんいち） 観光学部教授
都市人類学・都市社会学専攻。1984年立教大学社会学部社会学科卒業。同大学院社会学研究科博士課程前期課程修了。香港大学アジア研究センター、兵庫教育大学等を経て、98年より本学勤務。韓国・延世大学国際研究センター、フランス・国立科学研究センター都市人類学研究所の客員研究員を歴任。主要著作に『都市エスニシティの社会学』、『香港社会の人類学』、『アジア都市文化学の可能性』、『観光のまなざし』の転回』（以上共著）など。

小沢健市

（おざわ・けんいち） 観光学部教授
1972年東洋大学経済学部卒業、成城大学大学院経済学研究科修士課程、同博士課程・東洋大学大学院博士後期課程修了。東洋大学短期大学助教授・教授を経て1998年より本学勤務。経済学博士。主な著作に『観光の経済分析』、『観光を経済学する』（以上単著）、『観光学』、『観光の新たな潮流』（以上共著）、『観光の経済学』（訳書）、「景観を形成する要素としてのCommon Pool Resourceの経済分析」（単著、『日本国際観光学会論文集』第12号所収）など。

斎藤松三郎

（さいとう・まつさぶろう） 観光学部教授
1946年生まれ。1970年東京大学文学部独語独文科卒業。同大学人文科学研究科修士課程修了。東京大学助手、東洋大学講師を経て、1980年より立教大学勤務。専門分野はオーストリア、ドイツ文学。特に作家のもの見方、審美観、文体の研究。その他、旅と文学、ドイツ語圏の文化（環境・高齢者・教育など）の諸問題を扱う。

田中望

（たなか・のぞみ） 観光学部教授
立教大学観光学部と同大学院文学研究科比較文明学専攻で、留学生との交流、アジアの人びととの交流などについて教えている。大学および広く日本社会に、多文化主義的なメンタリティをそだてること、他者とのあいだの交流の呼びかけにこたえて、すぐに動く身体をつくることなどを目標にしている。

舛谷 鋭

（ますたに・さとし） 社会学部助教授
1964年東京生まれ。早稲田大学第二文学部卒業、東洋大学文学研究科修士課程修了。大正大学文学研究科博士課程中途退学。早稲田大学助手、本学嘱託講師を経て、1999年より現職。2005年度はマラヤ大学東アジア学科で教鞭を執る。東南アジア華人研究、特にマレーシア、シンガポールの華人文学を専攻。主要著作に『国民開発政策下のマレーシア』、『亜細亜通俗文化大全』、『日本占領下の英領マラヤ・シンガポール』、『東南アジア文学への招待』（以上共著）など。2006年度より観光学部に移籍。